

イベント名	「年齢」から言語教育を問い直す—日本語教育とエイジズム、年齢性との関連から—		
実施委員会	企画委員会	開催場所	オンライン
開催日時	2025/5/10(土) 13:00~15:00	参加人数	32名
参加資格	会員・非会員	参加費	無料
イベント概要 (案内文など)			
<p>● イベント案内文</p> <p>日本語学習者とは「何歳」でしょうか。「人種」やエスニシティ、ジェンダーの視点から言語教育を問い直す試みがみられるようになりました。一方で、「年齢」の視点から問い直されることはあまりなかったのではないのでしょうか。数少ない先例には、『『あの子』問題』として問題提起されたものがあります(古屋, 2025[2012]); つなごうねつ(有森ほか), 2013; 勝部, 加藤, 2024)。この議論のなかでは、成人学習者を「子ども」扱ったり、逆に自分より年上の学習者を「おっさん／おばさん」扱ったりすることに対して意見が交換されています(つなごうねつ(有森ほか), 2013)。このような年齢に基づく関係性は、固定的な「教師—学生」関係につながることも考えられます。そのため、「日本語学習者を社会的な存在として捉える」言語教育観(文化審議会国語分科会, 2021)を本来の意味で達成するための障壁になることも考えられます。</p> <p>そこで、本例会では、日本語教育を事例に「年齢」の視点から言語教育に対して問題提起を行い、みなさんと一緒に批判的に内省し、今後の言語教育を考える機会を提供したいと考えています。一歩立ち止まって考えると、「年齢」には“不思議なこと”がたくさんあります。それは社会のなかで何らかの「常識的な」想定があり、それが年齢に関連する矛盾を見えなくするためだと思います。そのような「常識的な」想定を一緒に見つめ直し、言語教育の実践を見直す機会にできればと思います。具体的には、次のような 2 つの活動から成るワークショップを考えています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 久保田(2008)の4Dアプローチを参考に、(1) 記述的、(2) 多樣的、(3) 流動的、(4) 言説的な年齢の側面に着目した活動(吉井, 2024; 岡本ほか, 2024)</li> <li>2. 1.を踏まえて日本語教科書の記述について再考する活動</li> </ol> <p>「年齢」に関連する「常識」にはどのようなものがありますか? それ言語教育にどのように影響するのでしょうか? 本企画では、主な事例を日本語教育の文脈から示しますが、広く言語教育を「年齢」の視点から一緒に考えてみたいと思います。</p> <p>参考文献</p> <p>岡本舞夏, 金侑蘭, 吉井雄樹(2024). 『言語教育で「年齢らしさ」をどのように扱うことができるのか—韓国の日本語学習者と教師との話し合いから考えたこと【韓国】』日本語教育学会 2023 年度グローバル人材奨励プログラム. <a href="https://www.nkg.or.jp/musubu/contents/kaigai/20240520_2698780.html">https://www.nkg.or.jp/musubu/contents/kaigai/20240520_2698780.html</a></p> <p>勝部三奈子, 加藤林太郎(2024). 「あの子」問題を再考する—「子」の使用による相互行為達成の視点から『言語文化教育研究学会第 10 回年次大会「言語文化教育研究とは何か」予稿集』(pp. 92-97).</p>			

<https://alce.jp/annual/2023/proc.pdf>

久保田竜子 (2008). 日本文化を批判的に教える. 佐藤慎司, ドーア根理子 (編) 『文化、ことば、教育—日本語 / 日本の教育の『標準』を越えて』 (pp. 151-173) 明石書店.

つながろうねっと (有森丈太郎, 青山玲二郎, 佐野香織, 瀬尾匡輝, 山口悠希子, 米本和弘) (2013). 「あの子」問題から「教師 - 学習者」の関係について考える『言語文化教育研究会 2013 年度研究集会大会「実践研究の新しい地平」予稿集』 (pp. 2-9). <https://alce.jp/dat/proc2013/01arimori.pdf>

古屋憲章 (2025 年 1 月 5 日). 「【再掲】「あの子」問題」『Note』

<https://note.com/furuyanoriaki/n/nac520eb62197>. (原典 2012 年)

文化審議会国語分科会 (2021). 「日本語教育の参照枠 報告」.

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf)

吉井雄樹 (2024). 年齢の多様性を理解する活動の試案—プロジェクト学習における教室活動を事例に『日本語教育方法研究会誌』30(2), 24-25. [https://doi.org/10.19022/jlem.30.2\\_24](https://doi.org/10.19022/jlem.30.2_24)

話題提供者: 吉井雄樹 (関西学院大学大学院)

### 活動報告

#### ● 当日の流れや様子

本企画は「年齢」の視点から日本語教育を事例に言語教育を問い直すことを主なテーマとしました。本企画の目的は、日本語教育を事例に「年齢」の視点から言語教育に対して問題提起を行い、企画参加者と一緒に言語教育を内省し、今後の言語教育を考える機会を提供することです。そして、具体的な目標を、記述的、多様の、流動的、言説的な「年齢」の側面を認識し、自分の意見を持つことに設定しました。この目標を達成するために、本企画を「1. 本企画の背景」、「2. ワークショップ①4D アプローチ」、「3. ワークショップ②日本語教科書を再考する」の3つから構成し、実施しました。

#### 1. 本企画の背景

本企画の背景として、a) 企画者の紹介、b) 関心や視点の共有、c) 数少ない先例の紹介、d) 議論の意義、e) 企画の趣旨を説明しました。それぞれ以下の通りです。

- |             |   |
|-------------|---|
| a) 企画者の紹介   | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 大学生のとき留学生と<u>ほぼ毎日話す</u>・・・<br/>→これが仕事になればなあ～</li> <li>■ 修士課程、そして、中国の大学で日本語を教える<br/>→楽しさと、<u>自分がしたい日本語教育</u></li> <li>■ 関西学院大学①大学院博士後期<br/>②日本語教育センター非常勤</li> <li>■ 年齢の視点から日本語教科書の批判的分析 (例えば、吉井, 2024)</li> </ul> |
| b) 関心や視点の共有 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「年齢」とはなにか?</li> </ul>  |

	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「日本語学習者」「日本語教師」って、何歳？</li> <li>■ どんな人のこと？</li> <li>■ 私の関心</li> </ul> <p style="margin-left: 20px;">→人々&gt;年齢&gt;教師/学生&gt;どんな意味が、どのように、なぜ？</p>
c)数少ない先例の紹介	<p>「あの子」問題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 教師が成人の学習者を「子」と呼ぶ行為</li> <li>■ 古屋憲章と佐藤貴仁の週刊「日本語教育」批評から (古屋, 2025[2012])</li> <li>■ 成人学習者を「子ども」扱い (つながろうねっ(有森ほか), 2013)</li> <li>■ 自分より年上の学習者を「おっさん/おばさん」扱い (つながろうねっ(有森ほか), 2013)</li> <li>■ 年齢に基づく関係性は固定的な「教師—学生」関係へ</li> <li>■ →本来の意味で「日本語学習者を社会的な存在として捉える」？</li> </ul>
d)議論の意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 日本語教師の専門性(館岡, 2021)             <ul style="list-style-type: none"> <li>① 日本語教育の理念/教育観</li> <li>② 実践する日本語教育のフィールドの固有性</li> <li>③ ①と②に最適な教育方法を編成し実現できる</li> </ul> </li> <li>■ 教師が教育理念/観の自覚が前提</li> <li>■ 教師がナイーブに信じ込んでいる潜在的なイデオロギーもある (フレイレ, 2005/2018)</li> <li>■ →批判的に内省し、自分の教育/学習観を考える</li> <li>■ ☆その過程に「年齢」の視点から言語教育を問い直すことが有効では</li> </ul>
e)企画の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 目的:日本語教育を事例に「年齢」の視点から言語教育に対して問題提起を行い、企画参加者と一緒に言語教育を内省し、今後を考える機会を提供</li> <li>■ 目標:記述的、多樣的、流動的、言説的な「年齢」の側面を認識し、自分の意見を持つ</li> </ul>

**2. ワークショップ①4D アプローチ**

ワークショップ①は久保田(2008)の4Dアプローチを参考にして組み立てました。4Dアプローチとは、記述的、多樣的、流動的、言説的の4つの英語の頭文字のDから、文化を教えるための批判的なアプローチです。本企画では「年齢」に着目しています。そのため、久保田(2008)の4Dアプローチにある文化を「年齢」に置き換えることにしました。具体的には次の4つの側面から「年齢」を批判的にアプローチしました。

① 年齢を規範的ではなく記述的(descriptive)に理解する

- ② 年齢内の多様性(diversity)に注目する
- ③ 流動的(dynamic)な年齢の性質をとらえる
- ④ 年齢は言説的(discursive)に構築されていることを認識する

ワークショップ①では上記の 4 つのそれぞれの側面に対して、教科書の記述を用いた導入、企画者が用意したテーマを基にした話し合い、話し合いのメモを用いた共有や説明の流れで活動を行いました。

ただし、導入で用いる教科書の記述は、その次に続く話し合いのきっかけとして批判的に用いることが目的です。そのため、その教科書が使えるかどうか等の有用性や、良いか悪いか等の是非を問うことが目的ではありません(熊谷, 2008; 久保田, 2008)。また、教科書の開発には、さまざまな思いが込められているため\*1、それらを無意味に否定することが目的というわけでもありません。教科書には作成者等の顕在的な意図だけでなく、潜在的な意図が反映されていること(間, 2002)を踏まえるなら、そのような潜在的なカリキュラムを可視化するという意味で批判的に考察することが、言語教師の専門性の構築に利用できると思われます。そのため、今回は教科書を批判的な検証の対象として利用したいと思います。

例えば、①記述的な側面を理解する活動では、初級の早い段階から導入されることがある「何歳ですか」のような「年齢を尋ねる」文型について、「いつ、どこで、誰から誰に、どのように、(そして、なぜそのように)」尋ねるのかを普段の言語行動から内省してもらうようにしました。

②年齢内の多様性について注目する活動では、そもそも「年齢を尋ねる」行為が成り立つ前提に疑問を投げかけました。そして、暦年齢だけではない「年齢」を『The Age of Me (私の年齢)』で用いられた質問項目のうち、「1) 他人からは、私は\_\_\_\_歳ぐらいに見える、2) 私の体は、\_\_\_\_歳ぐらいの人と同じだと思う、3) 私の考え方や関心は、\_\_\_\_歳ぐらいの人と同じだ、4) 私の社会的地位は\_\_\_\_歳ぐらいの人と同じだ、5) 気持ちとしては、私は\_\_\_\_歳ぐらいの人間だと感じる、6) 正直に言って私は、\_\_\_\_歳ごろがいいと思う」の 6 つの問い(カステンバウム, 1979/1983: 4)を用いて話し合ってもらい、自分の中に多様な「年齢」が存在していることを実感してもらうようにしました。

③流動的な年齢の性質をとらえる活動では、教科書の記述に見られる「若い」や「若くない」に付与されている暦年齢に言及した後、「若者は何歳から何歳」で「高齢者は何歳から何歳」かを話し合ってもらいました。確かに、制度や法律などでは暦年齢という数字で人々を社会的なカテゴリーで区別しています。しかし、それらには絶対的な根拠があるわけではなく、ゆえに時代によって変化していることを示しました。

④年齢は言説的に構築されていることを認識する活動では、19 歳や 24 歳に「学生」という属性を付与している練習問題があるのに対して、そのような練習問題で 72 歳が「学生」として登場することはなく、同じ教科書シリーズの作文教材で「ニュース」として表象されるのはなぜかを問いかけました。その後、「20 歳」や「70 歳」がどのような人であるかを話し合ってもらいました。もちろん、「20 歳/70 歳だから～」という理由でその人の性格や好みなどが決まるわけではありません。しかし、そのようなイメージがどこかで存在し、それが日本語教科書にもみられるのではないかということを示しました。

### 3. ワークショップ②日本語教科書を再考する

ワークショップ②では、ワークショップ①の話し合いを踏まえて、他の言語の教科書を紹介しました。特にドイツ語の教科書の記述を紹介し、日本語教科書と相対化することを目指しました。紹介したドイツ語の教科書では「年齢を尋ねる」文型の練習問題に「わからない」という応答が用意されていることや、個人的な情報を要求するインタビュー・タスクにはその前提を問い直す余地が残されている噴き出し等がみられました。

#### ● 参加者の反応、意見、感想など

以下、アンケートで答えていただいた感想などを一部要約して示します。ご回答ありがとうございました。

- ◇ 年齢について考えるきっかけになった
- ◇ 「自分の中にあるたくさんの年齢」という言葉から気づきを得た
- ◇ 他の年齢の方々と話すことで自分の考え方に気づくことができた
- ◇ 話すうちに、「年齢」由来の居心地の悪さのようなものを自分も感じていることに気づいた
- ◇ 「年齢」に関しては他のアイデンティティに関わる概念のようにセンシティブに扱ってこなかったのが、これからはもう少し慎重になったほうがいいかもと思った
- ◇ 年齢に関わる期待と実態のギャップに無自覚であったことに気づいた
- ◇ ドイツ語のテキストの答え方が興味深かった

注)

\*1 田中(2018)を参考にしました。

#### 参考文献

- カステンバウム, ロバート(1979), 池上千寿子, 根岸悦子, 平木典子(訳)(1983).『老年期—高年齢の心理学』鎌倉書房.
- 久保田竜子(2008). 日本文化を批判的に教える. 佐藤慎司, ドーア根理子(編)『文化、ことば、教育—日本語/日本の教育の『標準』を越えて』(pp. 151-173) 明石書店.
- 熊谷由里(2008). 「日本語を学ぶ」ということ—日本語の教科書を批判的に読む. 佐藤慎司・ドーア根理子(編)『文化、ことば、教育—日本語/日本の教育の『標準』を越えて』(pp. 130-150) 明石書店.
- 館岡洋子(編)(2021).『日本語教師の専門性を考える』ココ出版.
- 田中祐輔(2018). 「石沢弘子 日本語の花を咲かせる—『にほんごのきそ』『しんにほんごのきそ』『みんなの日本語』制作秘話」『日本語教育 100 年史』<https://oralhistory-jle.com/archive/329/>
- つなごうねつ(有森丈太郎, 青山玲二郎, 佐野香織, 瀬尾匡輝, 山口悠希子, 米本和弘)(2013). 「あの子」問題から「教師—学習者」の関係について考える『言語文化教育研究会 2013 年度研究集会大会「実践研究の新しい地平」予稿集』(pp. 2-9). <https://alce.jp/dat/proc2013/01arimori.pdf>
- 間晶子(2002). 「期待される外国人日本語学習者」像—日本語教育教科書における登場人物の考察から. 森住衛(監修)『言語文化教育学の可能性を求めて』(pp.84-98) 三省堂.

古屋憲章(2025年1月5日).「【再掲】「あの子」問題」『Note』

<https://note.com/furuyanoriaki/n/nac520eb62197>. (原典 2012 年)

フレイレ, パウロ(2005), 三砂ちづる(訳)(2018).『被抑圧者の教育学 50 周年記念版』亜紀書房.

吉井雄樹(2024)初級日本語教科書にみられる高齢者像『The 30th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings 2024』(pp.172-185).

[https://pjpgf.princeton.edu/sites/g/files/toruqf1151/files/documents/PJPF24\\_Proceedings\\_24.pdf](https://pjpgf.princeton.edu/sites/g/files/toruqf1151/files/documents/PJPF24_Proceedings_24.pdf)